

氏 名 出 本 充 代
 学位(専攻分野) 博 士 (文 学)
 学 位 記 番 号 文 博 第 118 号
 学位授与の日付 平成 10 年 11 月 24 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
 研究科・専攻 文 学 研 究 科 梵 語 学 梵 文 学 専 攻
 学 位 論 文 題 目 *Avadānaśataka* の梵漢比較研究

(主査)

論文調査委員 助教授 小林 信彦 教授 御牧 克己 教授 徳永 宗雄

論 文 内 容 の 要 旨

仏教説話集『アヴァダーナシャタカ』は、サンスクリットで伝えられるアヴァダーナ文献としては成立が古く、後期アヴァダーナ文献の母体ともなった重要な作品である。この説話集は十章から成り、それぞれの章には共通の主題のもとに十点の説話が収められ、「行いと報いの対応法則」(因果応報)を例示する説話が百点集められている。幸いにして、サンスクリット本の外にチベット語訳と中国語訳が伝わっていて、資料の点では恵まれているが、今まで本格的な研究は行われなかった。ここに提出された論文は、現存サンスクリット本と中国語訳との相違点を明らかにした上で、その原因を探ることによってテキストの成立と変化を跡付けようとするものである。

この論文の第一章では、まず『アヴァダーナシャタカ』の構成を概観した後で、三つのヴァージョンに見られる題名の対応を示すために「対照表」を挙げ、さらにサンスクリット本に基づいて各章の内容を簡潔に記している。サンスクリット本とチベット語訳は説話の順序が完全に一致するが、サンスクリット本と中国語訳の間では対応しない説話が四つあり、数個所で順序が入れ替わっている。サンスクリット本の言語はおおむね正確なサンスクリット散文であり、数多く用いられている定形句から受ける印象とは逆に、物語の記述は極めて簡潔である。一方、中国語訳の方はサンスクリット本ほど定形句が目立たないので、一見したところ簡素なようであるが、定形句を除いた部分ではむしろ中国語訳の方が丁寧に描写していることが多い。

次に、成立年代について研究史を紹介した上で通説の問題点を指摘する。『撰集百緣経』の訳出年代を三世紀とする通説は、法経の『衆経目錄』(594)に溯る伝承を根拠とする。この伝承によると、『撰集百緣経』は三世紀の支謙が訳したという。ところが、仏典目錄の歴史の中で跡付けてみると、この伝承は信用できるものではない。現存する最古の仏典目錄である『出三蔵記集』には『撰集百緣経』が挙げられていない。法経目錄の三年後に編纂された『歴代三寶記』でも、支謙訳とされる129点の經典の中に含まれておらず、法経目錄に倣って作られた「入蔵録」の部分に現れるに過ぎないので、法経の記述を転載したと考えられる。それ以後の仏典目錄では、法経の記述が継承されている。

さらに他の文献との関係に注目する。『撰集百緣経』と字句が一致する説話が『賢愚経』にいくつか見られることはすでに以前から知られていたが、詳細な比較検討はなされたことがなく、成立年代に関連して明確な結論を出した研究者はいなかった。さて、二つの文献を詳しく比較して見ると、『撰集百緣経』に伝えられる話の方に不自然な表現が多く、材料として用いた『賢愚経』のテキストを読み間違えた個所すら見られるのである。このことから見て、『撰集百緣経』の訳者は『賢愚経』を参照しながら翻訳したと考えられる。そうすると、『撰集百緣経』の訳出年代は『賢愚経』が訳された445年よりも後ということになる。さらに、516年に成立した『経律異相』に『撰集百緣経』からの引用が全くないという状況を念頭に入れ、六世紀末の仏典目錄に初めて挙げられる事実を考慮すると、『撰集百緣経』の訳出年代は六世紀の中頃と想定される。これによって、通説より200年以上も年代が下がることになる。そうすると、『アヴァダーナシャタカ』の成立を紀元100年頃とする通説は根拠を失う。それに、中国語訳の年代を基に祖形『アヴァダーナシャタカ』の年代を考えることはで

きても、現行サンスクリット本の年代はこれとは別の問題である。

第二章はこの論文の本体を成すものであり、現存サンスクリット本と中国語訳『撰集百緣経』のテキストが比較される。第一節ではサンスクリット本の主要な定形句を整理して、その使用状況を検討している。続いて中国語訳『撰集百緣経』の定形句を挙げ、この翻訳の原本にもすでになんかの定形句が用いられていたことを示すとともに、テキスト発展史の上でこの原本が占める位置を知る手掛かりとして独自の表現に注目する。

サンスクリット本と中国語訳には、対応しない説話がそれぞれ四つあり、第二節ではこの問題が取り上げられる。中国語訳に伝えられる四つは、いずれも収められている章の主題に合致せず、三つまでが盗賊の話であり、同じ出典から抜き出されたものと考えられる。サンスクリット本に伝えられる四つのうち二つは、定形句の乱れから見て、この本に見られる他の説話を複製加工したものであり、残りの二つは他の文献から借用したものである。したがって、この四つに相当する話は中国語訳以前から失われていたか、原テキストの成立当初から存在しなかったかのいずれかである。

策三節ではサンスクリット本と阿含經典との関係が論じられる。サンスクリット本にしか見られない場面描写など12箇所は、阿含經典からの引用であり、しかもその半数は求那跋陀羅訳『雑阿含經』に逐語的に一致する。したがって、『雑阿含經』が翻訳された五世紀の中頃より後で『アヴァダーナシャタカ』に編入されたと考えられる。残りの部分は増一阿含や『イティヴッタカ』の系列に属する文献に平行文が見られることから考えて、現存しない北伝の増一阿含が出典であったと見られる。このような挿入が行われた結果として、説話の与える教訓が強調されることは確かにある。しかしながら、一方では単に登場人物や場面から連想されたに過ぎない場合もあり、説話集編纂者の意図は計り難い。

次に、サンスクリット本と根本説一切有部律との関係が論じられる。『ディヴィヤ・アヴァダーナ』の場合なら、根本説一切有部律から説話を採っていると言えるのであるが、現存するサンスクリット本で見る限り、『アヴァダーナシャタカ』の場合は状況がそれほど単純でない。根本説一切有部律と逐語的に一致する箇所がいくつかの説話に見られるが、一つ一つの説話について見ると、相互関係は一様ではなく、どちらが元であるのか決め難く、別の文献が介在している可能性もある。いずれにしても、『アヴァダーナシャタカ』の改変にかかわっていたのは、根本説一切有部にかかわる者であったと言える。

さらに、一つ一つの説話で行われた改変の例を示すために、三つの説話が取り上げられる。第六話のチベット語訳はサンスクリット本と一致せず、中国語訳と一致している。したがって、この説話の場合は中国語訳とチベット語訳が原テキストに溯り、サンスクリット本はチベット語訳の成立後に改作されたことになる。第九十話は中阿含の伝承との折衷による改作である。そして、第九十二話は阿含經の挿入に伴う改作である。現在場面の部分的な改変が過去場面に影響を及ぼすことがあり、他の伝承を採り入れて過去場面を増補した例もあるし、『アヴァダーナシャタカ』に伝えられる他の説話の過去場面を再利用する例もある。

テキスト改変の痕跡は中国語訳にも見られ、最後にこの問題が取り上げられる。さて、『撰集百緣経』と『賢愚経』とに共通する説話には、部分的に字句が一致するものがあり、ここでは四つの説話が検討される。『撰集百緣経』の訳者は『賢愚経』の豊かな内容を採り入れながらも、原本の内容をなるべく尊重して、両者の折衷を図っていることが分かる。さらに、『賢愚経』以外の文献との関係についても論じられ、『撰集百緣経』第九十九話が検討される。この説話ではシャーリプトラの叔父が主人公であり、シャーリプトラとマウドガリヤーヤナがブッダに帰依する次第が長々と挿入されている。この部分に挿入される四つの詩節が『普曜経』と『中本起経』に含まれる詩節に二つずつ対応することから、この二つの文献が関与しながらも現在に伝わらないブッダ伝があったと推測され、これが第九十九話の帰依場面で使われたのではないかと考えられる。

『賢愚経』に基づいて加筆した部分を除けば、『撰集百緣経』ではそれほど大きな変化が起きておらず、原本が概してよく伝えられていると考えられる。現存のサンスクリット本と中国語訳の間に認められる相違は、多くの場合、サンスクリット本で起こった変化に帰せられる。中国語訳の底本となった古いテキストは、その後になんか大きく改変されたが、その際に参照されたのは根本説一切有部に伝えられる諸文献であった。そして、チベット語訳の底本となったテキストにも部分的な改変が加えられた。

論文審査の結果の要旨

「アヴァダーナ」と呼ばれるジャンルの作品は、「行いと報いの対応法則」(因果応報)を物語形式で表現したものである。古代インドにおける仏教の実態を知る上で貴重な情報源であり、サンスクリット説話史を構築する上で不可欠な資料である。筆者の取り上げた『アヴァダーナシャタカ』は、最も古く最も重要なアヴァダーナ作品であるが、本格的な研究は近年まではほとんどなかった。この度提出された学位論文は、『アヴァダーナシャタカ』のテキストを扱ったものであり、サンスクリット本と中国語訳『撰集百緣経』とを比較して、この文献の原テキストが成立した後で起こった変化を跡付けようとするものである。

『アヴァダーナシャタカ』のサンスクリット本は、比較的早くから知られていて、すでに19世紀の50年代にビュルヌフがいくつかの説話を翻訳し、19世紀末にはフェールがビブリオテーク・ナショナル所蔵の不完全な写本を使って試みた全訳をパリで出版した。そして、20世紀初頭にはケンブリッジ写本を使ってスペイヤーが初めて校訂を試み、その成果をペテルスブルグで出版した。しかしながら、その後は研究が進まず、内容が特異な第100話を除いては、取り上げられることがほとんどなかった。アヴァダーナの研究は現在の古代インド文献学で大きな空白となっていたと言えよう。サンスクリット文学研究者の関心はヒンドゥー文学に集中し、仏教学研究者はもっぱら教理文献に興味を示して、仏教説話はその重要性にふさわしい扱いを受けてきたとは言えない。

ところが、研究が充分に進まないままに、『アヴァダーナシャタカ』の成立年代を西暦100年頃とする仮説が通説として定着し、このことがサンスクリット文学史の構築に少なからぬ影響をもたらした。年代が確定しにくい一群の初期のサンスクリット仏教文学の年代を想定する際に、『アヴァダーナシャタカ』の仮説年代が論議の出発点として使われたのである。例えば、サンスクリット仏教説話集『ジャータカマラー』に『アヴァダーナシャタカ』にあるのと同じ詩節が見られることは早くから知られていたが、西暦100年という早い時期に成立した『アヴァダーナシャタカ』の方が早いと考えられ、1960年代にアルスドルフが韻律に基づく研究を発表して『ジャータカマラー』の先行を主張した後も、依然として状況は変わらなかった。

サンスクリット・テキストの年代を確定する上で決定的な根拠となっていたのは、中国語訳の訳者を呉の支謙とする中国の伝承である。この伝承については、すでに1930年代に林屋友次郎が用語の面から強い疑念を抱き、同様の疑念を抱く干潟龍祥は『賢愚経』との類似に着目したが、通説を完全に振り切れなかったからか、やはり『撰集百緣経』を『賢愚経』の前に置くに留まった。サンスクリット本と中国語訳の比較研究に先鞭をつけたのは、インド人研究者バグチであり、『アヴァダーナシャタカ』の第100話を取り上げ、中国語訳に比べてサンスクリット本に定形句が多いことに着目し、増補の結果であると考えた。筆者はこのような先行研究から着想を得て、この説話集全体を通して定形句の比較研究に取り組んだのである。

まず、中国語訳『撰集百緣経』と『賢愚経』に共通する話を詳細に比較した。共通する説話には部分的に字句が一致するものがあり、そのような場合は『撰集百緣経』の表現の方が筋運びに整合性を欠き、『賢愚経』のテキストを読みちがえた個所さえある。このような検討を重ねた結果、『撰集百緣経』の方が『賢愚経』を使っているという結論が得られた。そうすると、『賢愚経』の成立が五世紀の中葉であるから、『百緣経』の成立はそれ以後ということになる。これでサンスクリット本の年代が決まるわけではないが、少なくとも年代下限が今までよりも200年も下げられることになり、紀元後100年という古い時代に成立年代を置く通説は根拠を失った。

この論文では、現存のサンスクリット本と中国語訳の間に見られる相違を細かく指摘し、サンスクリット本で起こった変化に帰せられることが多いことを明らかにした。そして、改変の際に根本説一切有部に伝えられる諸文献が参照されたことを明らかにした。サンスクリットで伝えられる最も重要な仏教説話集のテキスト変遷について、現存資料を丁寧に検討して細かい論証をしたことは画期的であり、本論文の価値はこの点にある。それぞれの資料はよく分析され、展開される論議は概して説得性のあるものである。とはいえ、特に構成の面で本論文は工夫の余地を残している。例えば、サンスクリット本と中国語訳とのテキスト比較を始めるに際して、冒頭で詳しいテキスト対応表を挙げるのであるが、そこには各説話の要約もなければ文脈説明も不十分であり、この表の意味を理解するには第三節以下の記述を先に読まなければならない。全般的

に見て、筆者自身の頭の中で自明になっている事項については詳細に論じないくらいがあり、全体をよく読めば考えていることは分かるのであるが、他の研究者が参照する際にはやや不便な構成となっている。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成10年9月4日に審査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。